

**第5回京都市総合計画審議会
議事録**

日 時：令和7年3月19日（水）10:00～12:30

会 場：京都市国際交流会館「特別会議室」

出席者：

1 京都市総合計画審議会委員（五十音順、敬称略）

安保 千秋	弁護士
小川 さやか	立命館大学大学院先端総合学術研究科教授
阪部 すみと	Tsunagary オフィス合同会社最高執行責任者
杉田 真理子	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
鈴鹿 可奈子	株式会社聖護院八ッ橋総本店代表取締役社長
曾我 謙悟	京都大学公共政策大学院院長
高屋 宏章	社会福祉法人京都市社会福祉協議会会長
田中 成美	市民公募委員
貫名 涼	京都大学地球環境学助教
濱崎 加奈子	公益財団法人有斐斎弘道館館長／ 京都府立大学農学食科学部准教授
原 敏之	日本労働組合総連合会京都府連合会会長
福富 昌城	花園大学社会福祉学部長
藤野 敦子	京都産業大学現代社会学部教授
プラー ポンキワラシン	市民公募委員
牧 紀男	京都大学防災研究所教授
松井 道宣	一般社団法人京都府医師会会長
宗田 好史	関西国際大学国際コミュニケーション学部教授／ 京都府立大学名誉教授

2 特別委員

野村 将揮	ハーバード大学デザイン大学院／京都哲学研究所／ Yamauchi No.10 Family Office／京都大学成長戦略本部
-------	--

以上18名

1 開会

司会（都市経営戦略監）

ただ今から、第5回京都市総合計画審議会を開催する。委員の皆様におかれは、大変お忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。本日の会場である京都市国際交流会館は、1978年の「世界文化自由都市宣言」の趣旨にのっとり、市民の国際交流拠点として1989年にオープンしている。このような場所で長期ビジョンを議論できることを非常に有意義に感じている。

本日は、21名中18名の委員に御出席いただいている。審議会は公開とし、報道関係者席を設けるとともに、市民の皆様方に傍聴いただいている。また、記録のために録音、録画を行うが、御了承いただきたい。

さて、本日の第5回審議会では、長期ビジョン（仮称）の序文案を示し、そのうえで序文が示す3つの思想・価値観を踏まえためぎすまちの姿について、御議論いただきたい。当初はビジョンの本文案を御審議いただく予定であり、実際に野村特別委員には2万字にもおよぶ本文案を執筆いただいたところだが、この間、市長と事務局において議論を重ね、骨子で示している第四章「京都市のこれから」の部分について、どのようなまちを目指すのかという座標軸を定めるために、もう少し審議会において議論を深める必要があると考えた。従って、第5回審議会では、「序文」と「めぎすまちの姿に係る論点」についての御審議をお願いすることとした次第である。

続いて、審議に移る前に、配布資料のうち資料2、資料3、資料5について補足する。

資料2は、本日議論いただきたい7つの論点を記載している。P. 2以降は、論点ごとに審議会委員の意見や未来共創チーム会議からの提言、特設サイト等で集めた市民の皆様からの意見を紐付けしたものである。この資料は後ほど事務局から説明する。

資料3は、特設サイト「みんなの理想京 ideal Kyoto」や市民参加型のイベントなどにおいて寄せられた御意見約1万3,700件を、テーマごとに分類し、AI分析によって意見に含まれる要素と件数を整理し、その傾向を可視化した資料である。

資料5は、第1回および第2回審議会で配布した資料「京都市をとりまく社会経済情勢」をひとまとめにしたもので、改めてお配りしている。

2 議事

（1）長期ビジョン（仮称）に係る審議

司会（都市経営戦略監）

それでは、ここからの進行については、宗田会長にお願いする。

宗田会長

早速だが、皆様のお手元には「長期ビジョン（仮称）序文（案）」をお配りしている。まずは、執筆いただいた野村特別委員から、作成に当たったの考え方などの御説明を伺う。その後、資料2「長期ビジョン（仮称）のめざすまちの姿に係る論点整理（事務局案）」について事務局から説明いただき、論点について委員の皆様は御意見を伺っていきたいと思う。

それでは、野村特別委員、よろしくお願いします。

野村特別委員

お手元に見開きのA3で「序文」と冠したものがおありかと思う。どういった考え方で執筆したか御説明差し上げたい。

序文の最初の6行分の3行目・4行目・5行目、「歴史と文化」、「自然への畏敬」、「自他の生」からそれぞれ始まる一文が、以降の3つのパートに対応する構成となっている。

すなわち、「人間は過去に生かされ、未来を生きている」から始まるパートが冒頭の「歴史と文化を介して」と、次のパートの「自然への畏敬」から始まるパートが冒頭の「人間は自然に生かされ、自然を生きている」、最後に「人間は共同体に生かされ、共同体を生きている」が「自他の生」と対応している。このような構成を御認識いただいたうえで、まずは各自にて黙読いただければと思う。

黙読の時間に先立って、各パートの一文目についてのみ簡単に触れたい。私自身、京都市で生まれ、東京で12年過ごして、京都に戻ってきた際に強く感じたこと、また、審議会の場をはじめ委員の皆様方との意見交換を踏まえて感じたことを、各パートの一文目に記している。1つ目のパート。過去と現在と未来が、連綿と不断に連続している。過去の蓄積を引き受ける形でいま現在が成り立っていると同時に、我々はまた、未来を創り出し継承する存在でもある。2つ目のパート。自然に生かされ、自然を生きている。我々人間が自然そのものの中にあるという、自然との不可分性が都市空間そして人々の生活において体現されている。最後に2ページ目に移って3つ目のパート。共同体や他者と自己存在がともに在るということ。社会では、人間は個人として独立して存在していることが前提されがちだが、いわゆる動的平衡をはじめとするさまざまな議論においては、自己なるものが極めて流動的かつ曖昧であり、時間、自然、共同体との相互依存の中であるという視点もある。以上、京都市においてはこれらの性質が顕著に思われ、それぞれの一文に記した。御一読いただいた上で、もう一度軽く説明したいと思う。

— 長期ビジョン（仮称）序文（案）を黙読 —

改めて何点か触れさせていただければと思う。こちらの序文がかなり理念的、概念的、抽象的であることは、強く自覚している。2万字の本文案を2月

に事務局と市長にお出ししたところ、全体がこのトーンではさすがに分かりにくいという御意見もいただき、大幅に修正する運びとなった。この序文は、これから修正される本文と比べて、圧倒的に理念的、概念的で、最も難しいものと御理解いただければと思う。

他方で、この形であえて序文を提示したのは、ある程度の格調や理念、抽象的な概念を提示することが、京都市の神髄、深みなどの証左の一つになり得るであろうという想いによるものであり、あえてこのような内容と筆致を採用している。可能であればこの筆致は堅持したいと考えている。

2万字の本文案をお出しした際に御指摘していただき本当にごもつともだと思った点として、あまりに説明調になると読む側も疲弊してしまうということがあった。文量としても、私自身が2万字を書き綴って感じたのは、やはり1万字程度が限度であろう。さらに短いほうが市民の方々にお目通しいただきやすいとも思う。

委員の先生方からも、審議会およびその他の場で、さまざまな御意見を頂戴している。事務局の皆さまには何度か申し上げているが、例えば事例集やデータ集、今日こちらの資料にも付されているが、御意見をまとめたものなどを、何らかの形で長期的にも参照できるような在り方を検討いただければと思っている。

繰り返し、私としては、恐らく多くの京都に関わる皆様方は特段に意識されたことはないものと拝察しているが、絶対的に独立して存在する個人、絶対的な現在、といった何か固定的で絶対的なものを想定すること自体が過去数世紀の思想的な潮流であるところ、京都市はこれとは少し違ったような文化、精神性が育まれ、保全されてきたのだと感じている。私自身も哲学の研究者の端くれであるため、京都市のこの点に強い敬意と愛着を抱いており、これをある程度は社会との接続を伴う形で形容したいと思ってこれを記した次第。

宗田会長

今の御説明を受けて、まず松井市長から一言いただきたい。

松井市長

足元が悪い中、また御多忙な中をお集りいただき、感謝申し上げます。本来であれば、本日は全文案を提示して議論いただく予定であった。今、執筆者の野村特別委員からの御説明があったが、野村特別委員にはこの間、非常に多忙にもかかわらず献身的に時間を割いていただき、感謝申し上げます。そのうえで、経緯を一言申し上げます。序文について、野村特別委員から非常に謙虚に説明があったが、非常に簡潔な中に含蓄深いものがあると思う。未来共創チーム会議の皆様が議論されていたような内容も含めて、概念・理念としての受け止めを、序文の中に相当尽くしていただいていると思う。文体については、ある程度執筆者の想いを受け止めていただけるとありがたい。

そのうえで、あえて全文ではなく論点を提示させていただくのは、長期ビジ

ョンはこれから25年の京都市の長期ビジョンであり、理念的な内容だけを示すものではないからだ。もちろん長期的なため、ある程度理念的にはなってしまうが、我々が今後25年というスパンで、この京都というまちのまち柄として、どのような項目を盛り込むのかについては、まず委員の皆様にしっかり論点として議論いただきたい。そのうえで、もう一度、事務局も含めた共同作業として執筆、あるいは執筆監修者としての野村特別委員のお力を借りて、行政文書としての論点を付さなければいけないと考えている。

向こう千年となってくると、なかなか我々も人知が及ばないことだが、野村特別委員が序文で見事に提示しているように、2025年時点での我々の歴史観が問われている状況の中で、京都というまちの千年の振り返りとして、様々な価値観、様々な異なる文化的な背景に基づくものを受け入れてきたのが、京都というまちだと思っている。1978年の世界文化自由都市宣言に言及するまでもなく、多様な価値観をいかに交ぜ合わせて、そして新しい京都ならではの価値観をつくっていく、自由な文化交流を成し遂げていくことが、基本のミッションであろうと思う。

この豊かな自然に恵まれたまちの歴史として、その自然との関係を我々が今後の25年間、更にその先をどのように考えていくか。21世紀は平和の世紀だと思っていたところが、少なくとも2025年の現時点で様々な混乱があり、なかなか紛争が絶えない。そのような状況の中で、まちとしてこの分断にどう立ち向かっていくのか。非常に大きく言えば、今の資本主義や民主主義の在り方について、2025年時点で京都というまちはどのような思いを持っているのかを提起しなければならない。

しかし、それより大切なことは、市民の目線である。ここで言う市民というのは、必ずしも京都市に住民票がある方だけではない。京都を愛し、京都にいろいろな形でコミットしてくださっている、世界中、日本中の京都ファンにとっての京都は、どのようなまちとして生きていくことが、このまち柄としてふさわしいのか。ビジョンではそのことを市民目線でも語りかけなければいけないと思う。

この資料2に記載している論点について、これまで様々な議論いただいているが、改めて長期ビジョンの中でどのような概念を入れていくかが論点である。野村特別委員がおっしゃったように、ある程度の枠の中でどのようなまちの姿をめざすのかを書かざるを得ない。その中で、京都というまちが経験したこと、例えば、論点7のような災害や感染症という今日的な課題など、市民がこれまで幾多の試練を受けてきたことを踏まえ、25年先までには様々な大災害も予想されていることも含め、考えるべきである。また、京都というまちは大学のみならず、様々な学芸で栄えてきたまちの在り方といった論点も必要ではないか。そして、都であるために幾多の戦乱からよみがえってきたのが、何よりも京都というまちだと思う。その戦乱からよみがえった時の京都のまちを結束させてきたものは何だろうか。私は文化の力だと思う。広い意味での文化の力である。単に芸術文化だけではなく、町衆といわれるような京都の

市民がどのような共同体を形成してきたのか。そういった事柄にも触れていただきたいと思う。論点について、皆様の御意見を聞かせていただき、その御意見をしっかりと野村特別委員と事務方で受け止め、これから全文を起草することが適切と思った次第だ。

委員の皆様におかれては、少し宿題が増えたと思われるかもしれないが、御意見を賜り、しっかりと受け止め、今後の日程に沿って親身に提示するというプロセスで策定まで進んでいきたいので、御協力をお願いする。

宗田会長

非常に分かりやすいお話であった。京都が長年にわたり文化を受容し、そして自然との共生関係をしっかりと整えていく中で、今、世界で起こっている分断にどう立ち向かうかをおっしゃったうえで、理念は高く掲げるけれども、市民目線で共に考えられるような長期ビジョンでありたいという、その議論が我々審議会に課されていると理解した。高い理想であるために、市民目線に下ろすためには、恐らく文化や自然観を媒介に使いながら、様々な例えを通じて、共感させる必要がある。審議会では未来共創チーム会議の皆様とも議論を重ねてきたが、それぞれ一生懸命に京都を学んでいると感じた。京都をどのように学んでいけば良いか、今の市長の発言、野村特別委員がめざされる序文の中のこととして、審議会は共有できたかと思う。

それでは、次は資料2「長期ビジョン（仮称）のめざすまちの姿に係る論点整理（事務局案）」の議論に移る。まず、資料について事務局から説明いただく。

荒木都市経営戦略室長

資料2「長期ビジョン（仮称）のめざすまちの姿に係る論点整理（事務局案）」を御覧いただきたい。本資料は事務局で作成したものである。

先ほど市長が申し上げたとおり、長期ビジョンの本文に、理念だけではなく、まち柄としてどういった内容を加えていくか、京都が何を大切にし、どのようなまちをめざすのかという座標軸を盛り込んでいくために、この資料を作成した。野村特別委員からも御説明いただいたように、長期ビジョンの根底には、序文で示す3つの思想と価値観、まちと人の時間軸、自然観、重層的な人間関係がある。それらを踏まえて、これまでに頂戴した審議会の皆様の御意見、未来共創チーム会議の皆様からの提言、特設サイト等で集めた市民等の御意見を踏まえた、7つの論点を設定した。

論点1、京都の生き方や暮らし方をどう受け継いでいくのか。

論点2、多様な文化との交流が生まれるまちとなるためには。

論点3、これからの時代における地域のつながりとは。居場所と出番、行政の役割など。

論点4、まちを形づくっていた豊かな自然環境をどう受け継いでいくのか。

論点5、学問・芸術・技芸をどう深めていくのか。

論点6、普通の暮らし、普通の幸せを実感できる社会とは。

論点7、災害や感染症等から立ち直るしなやかさをどう構築するのか。

長期ビジョン本文について、どの程度の抽象度や具体度で書いていくか、本日はこういった発言をしていくかを迷われているところがあるかと思う。事務局としては、これらの論点の基に、市民と行政が取り組むべきことについて、概念的なもの、理念的なものだけではなく、具体的な考え方なども含めて自由に多様な御意見をいただけたらと考えている。また、提示している7つの論点に、不足や別の視点等があれば、忌憚のない御意見をいただきたい。

なお、この7つの論点が、そのまま長期ビジョンの章立てや節立てになるわけではない。あくまでも本日の議論用であると御承知おきいただきたい。

P. 2以降は、これまでの審議会における皆様の御意見、特に長期ビジョン骨子に係る議論におけるめざすまちの姿に係る御発言や、未来共創チーム会議からの御提言、特設サイト等で集めた市民の皆様からの御意見を各論点と紐付けたものだ。参考として御覧いただきたい。これまでの御審議に加え、本日議論いただいた内容を、長期ビジョンで表現するめざすまちの姿をはじめ、本文作成に生かしていきたいと考えている。

松井市長

審議会の皆様には、新京都戦略案を参考に配布している。総合計画審議会には付していないが、私の残りの市長任期3年間、どのような方針で京都市政に臨むのかという基本指針である。この新京都戦略について、基本政策を細かく見て納得していただく必要はないが、P. 7以降にリーディング・プロジェクトを示している。ここの考え方は、極力この総合計画審議会で議論を始めた段階での考え方を盛り込んでいるつもりだ。もちろん3年間でできることとできないことがあるため、全て盛り込んでいるわけではないが、長期ビジョンが出来上がった暁には、長期ビジョンの考え方を踏まえて、一部修正しなければいけないものもあると思っている。3年間と個別の単年度の予算でどのような政策を提案するかが、政策的にはパッケージになっている。そのような意味で、例えば、毎年予算に盛り込むような事業や政策方針、あるいは3年や5年のレベルで盛り込むようなものなど、どちらかというと長期あるいは超長期を見渡した部分を議論いただきたい。

長期の方針がこのようなベクトルにあったとしても、短期的には異なるということがある。例えば、未来共創チーム会議で脱成長という概念を提示され、価値観としては非常に理解できる。しかし、現実に関西のまちづくりを考えた時に、脱成長という理念は非常に大切であるが、今の現実の京都市政を切り盛りする上では、場合によっては競争も必要な場合がある。世の中の政策はらせん状に進むようなもので、長期的なトレンドと、短期的に若干それと齟齬をきたすようなものがあつたとしても、現実の市民の生活を考える時には、今この価値観を大切にしなければいけない場合もある。そのような政策を実施しながら、皆さんに示していただいた中長期的なまちの在り方の中で、本当に

この政策判断は良いのかと常に立ち返って検討し、フィードバックを受けながら再検討し、そして中長期的にまち柄としてめざすべき方向を、しっかり我々は胸に刻みながら政策展開していくべきである。長期ビジョンと新京都戦略は、そのような関係にあると思っているので、御承知おきいただきたい。

宗田会長

おっしゃるとおりだ。新京都戦略は、全ての人に居場所と出番があるというような、かなり普遍的なレベルにもきちんと目配りしてもらっている内容になっているかと思う。その意味で完成度の高い政策だが、長期ビジョンということで議論しているため、めざすまちに関する論点をもう少し深掘っていきたいと思う。特に、「まち柄」という言葉を使っているが、どのようなまちであるべきかという座標軸の議論にもなる。委員の皆様のそれぞれの見地から伺っていただければと思う。

まず、高屋委員から発言をお願いしたい。京都市社会福祉協議会の会長として御参加いただき、前回本業の伝統産業の観点からお話いただいた。未来共創チーム会議と合同で議論した第2回審議会では、京の昼寝ということをおっしゃっていた。この論点1「京都人の生き方や暮らし方をどう受け継いでいくのか」は、基本的なことである。まさに京都人の人柄、暮らしぶりなど、そのような観点から、どのようなお考えがあるか御発言をお願いする。

高屋委員

私はどっぷりと町内や地域に浸かっているわけだが、近所で「あんた、好きで盆やってるんやね」と言われる。確かに好きでやっているが、「好きでやってるんやね」と嫌味たらしき言う人の裏には、地域のことを考えて私たちがいろいろなことを世話していることを分かってくれていると、そのような理解だ。京都の有名な話で、「田舎の学問うんぬんよりも京都に来い」という話があるが、我々はそうして先代の者から「京都の文化はこんなやで」「門はき」したら、こんななるで」といったことをずっと受け継いできたので、それが染み込んでいる。

私の祖母は壬生で材木屋をしていたが、夢のお告げをきっかけに、壬生の御土居から出てきたお地蔵さんを店の前に置いている。そのお地蔵さんを今も大事にして、商売をする時に毎日拝んでいる。そのようなことが、私の京都の暮らしの中にある。いろいろと難しいことは分からないが、審議会で議論したことは、何か別のところで噛み砕いて皆に説明してあげたいというのが、私の気持ちである。

宗田会長

非常に分かりやすく市民目線ということを御説明いただいた。

では、杉田委員は今の話を聞いてどう思われるか。

杉田委員

市民目線というところで話ができればと思っている。どのようなアイデアをどのような粒度で出せばよいか、考えあぐねて困っていたが、ここは小難しいことを言わず、一市民として話をしたい。

私は左京区の浄土寺という場所で活動しているが、その場所が私の理想のまちに非常に近い。海外に出ることがあっても、必ずこのまちに戻ってくると考えている。誰かにつくられたサービスやインフラをただ享受して消費しているだけではなく、市民一人一人がそこに関わっている状況があるから、私はこのまちが好きだと思っている。

例えば、法然院さんというお寺さんが敷地の一部を開放されて、コミュニティコンポストの活動をされている。そこでは、地域の一般家庭やレストランから出る生ごみを持ち込んで土を作っている。その土を使って、今度はコミュニティガーデンを作ろうという企画が生まれており、皆でシェア農園ができるような土地がないか探している。実現すると地域での食の自給率が上がる。

また、浄土寺に「ふもと」という場所が昨年立ち上がった。「0円マーケット」という、服や家具、器など地域の方々が不要になったものを、全て0円でボランティアの方が循環させているスポットがある。3月は、学生さんが引っ越される、引っ越してくる中で、そういった循環がたくさん起こっている。

最近よく目にするのは、学生さんやボランティアの方々による地域の空き家の清掃活動。空き家の清掃を業者さんに頼むと非常に高い金額になるが、それを地域福祉のような観点で、地域でやっている現状。

最近興味があるのはエネルギーで、近所の方々も参加されている小規模の太陽光発電システムの自作ワークショップがある。「みんな発電」というDIYエネルギーの手引書のような本があるが、それを皆で読み解きながら作っている。例えば、京都の場合、食料自給率は東京などに比べれば高いほうだと思うが、エネルギー自給率はまだまだ低い。エネルギーやそれにまつわるインフラの話は、今まで審議会で議論していなかったが面白いと思う。

近所でも最近よく見かけるが、アーティスト・イン・レジデンスの取組。マスツーリズムで、浄土寺エリアも銀閣寺が近く、これから桜の時期となるため、多数の観光客が来られる。観光客が、ただ消費、見て帰るだけではなく、レジデンスという形で、もう少し中長期で滞在をして、地域の方々と関わる、学生さんに何かレクチャーをして帰っていただく、何かしら地域に置き土産をして帰っていただけるような仕組みをつくっている。全てひっくるめて私がこのまちが心地よいと思うのは、与えられたものを消費するだけではなく、能動的に市民が関わっている状況があるからだ。

例えば、資料3を見ていた時に、問い「あなたが思う京都の惜しいところは」に対して「バス・鉄道・自転車等」といった回答が圧倒的に多い点が面白いと思った。与えられたものを消費するだけではなく、積極的に関わる市民という目線を見た時に、不便な交通状況がある中で、どのような使い方をするかというデザインのところにまで、市民が関われるような仕組みづくりができると良い。

浄土寺という場所をフィールドに、京都市よりも小さいディストリクトというレベルで、小さな活動をたくさん続けているが、消費ではなく生産ができるまち、与えられたインフラやサービスを消費するのではなく、積極的に関わる市民がいるまちが、これから必要になってくるのではないかな。

宗田会長

古い市民と新しい市民の対比となった。好きだからやっていることそのものである。旧浄土寺村には大文字保存会がある。お盆のお寺の行事であることもあり、父と長男で取り組まれていたが、だんだん家族の関わり方が変わってきたことも含めて、様々な年代の方が好きでやっている。柔軟に変化しつつ好きなことを続けているという、京都の市民感情、人柄、まさに市民目線が広がっていくと面白いと思う。

次はプラー委員に発言をお願いしたい。論点2「多様な文化との交流が生まれるまちとなる」について、市民目線の感覚でどのように思われるか。

プラー委員

古くから住まれている方が、好きなことだからやっているという点にとっても共感できる。しかし一方で、海外から来た目線では、海外の人にとって理解できない、理解しにくいものをどのように伝えていけば良いかが、大きな課題であり、大きなチャレンジであると思う。押し付けることはもちろんする必要はないが、京都らしさをどのように知っていただくかが大事ではないかと思った。自分も参加しよう、自分も関わろう、自分も関係を持とうと思っていただけるとより良いのではないかな。

宗田会長

プラー委員は自分も関わろうと思って審議会に来ていただいているが、京都は日本の他のまちや世界の他のまちと比べて、市民目線に立ちやすいまちだろうか。

プラー委員

大変そのように感じている。例えば、私のような住民でも、国際交流に関する会議や、百人委員会にも参加させてもらっていた。自分の意見を出せる場をこれからも続けて欲しい。

宗田会長

極めて重要な市の在り方であり、長年の積み重ねで実践できていることが重要なことだ。一つのまち柄、京都らしさとして大事にしていかなければいけない。多様な文化の交流が生まれる前提として、市民一人一人が好きで取り組んでいる点がある。

野村特別委員

委員の先生方、本当に感謝申し上げます。光栄にも委員の先生方に個別にお時間をいただき、御意見や御指南をいただいていた。それらについて、この場でも再度言及いただけるようであれば、ぜひともお願いしたい。これまでも事務局の方でも議事録を残していただき、私としても2冊目のノートが埋まりきるほどメモさせていただいているが、この場で御発言いただくこと自体にも意味があると思われる。どうか忌憚のない御意見をいただければと思う。

宗田会長

論点3の「これからの時代における地域のつながり」は、新京都戦略にも記載されている「居場所」と「出番」にもつながり、めざす一つのまちの姿ではないかと感じている。また、そこから世界に果たす役割に発展していくと思う。では、鈴鹿委員に発言をお願いする。

鈴鹿委員

全体に関わることだが、最初に市長から御説明いただいているが、最終的に長期ビジョンがどのくらいの抽象度になるかを例示などで示していただければ、もう少し意見が言いやすいと思う。

具体例をここで発言することはできるが、細かい内容になりすぎて新京都戦略に寄り過ぎてしまうと、それはそれで全く違いうだろう。長期ビジョンで抽象的にしたい場合も、抽象的過ぎると身近に感じなかったり、難し過ぎたりする。「これくらい具体化したい」「ここはこれくらい聞きたい」ということがあれば、教えていただきたい。

このビジョンは、審議会をはじめ未来共創チーム会議も、いわゆる文化などに関して感度が高い方の集まりだと思う。京都市民全体で見たとき、文化ということ掲げると、興味はあるけれども、少し高尚で、自分たちには関係ないと思ってしまう方もいる。そのような方の割合が結構高いのではないと思う。ただ私が思うのは、そのような方々こそ、京都で暮らしている中で、文化に触れている機会は実は知らないうちにたくさんあり、自身の生活に京都そのものが浸透している。

例えば、寺社仏閣などの歴史的建造物や自然に囲まれている。知らないうちに、京都に昔から住んでいる人や新しいチャレンジをされている方のつながりができる。皆さん驚かれるのが食。季節の和菓子を普通に買うことができ、スーパーでも買うことができる。季節に感度が高くなっていることや、普通ではそこまで頻繁には出てこない抹茶にしても、京都はお寺に行くと普通に飲める。また、祭りも同様である。

京都では生活に浸透しているけれども、それを自覚されていない京都市民の大多数の方々が、本当の次の京都の担い手になっていく方ではないか。そのような方々に向けて、あまりに抽象的なものを出し過ぎると、住んでいる人のことを考えていないということで分断につながる。例えば、まちの課題を考えると、

交通インフラと観光と市民生活のバランスがトップでほとんどを占めている。その部分を読んだだけで「あ、私たちのことも考えているな」と思われるようにしなければならない。「自分ごとではないな」と思われなければならない。そう思われてしまうと、京都を離れてしまうことにつながり、京都を支えるマンパワーの減少にもなってしまう。自分ごとに見えるように、ある程度の具体性も持ちながら抽象的にするという、とても難しい部分。そこで冒頭申し上げたように、長期ビジョンがどれくらいの抽象度にするか知りたい。

松井市長

25年前に鷺田先生が中心になって起草された現行基本構想は、議論を繰り返し重ねた上で策定された。私が野村特別委員や事務局に伝えているのは、それと同じような文章を書く必要はないということだ。一つの個性がある文章でよい。

現行基本構想が1万2千字くらいの文章で、市民の方が読まれたときに、短いとは思われないと思うが、文体を相当工夫されていると思う。例えば、このような日常の市民の風景をどう維持していくかといった、具体的な表現が部分的にはあってもよいと思うが、それがずっとつながっていくと、少し苦しい部分もあるかもしれない。あとは文章の工夫が必要だ。どのような論点を市民の皆さんに分かっていただくか。例えば、京都のまちのまち柄とは何だろうか。市民、地域のコミュニティ、共同体とはどのようなものか。

「このような風景をわれわれは大事にしたい」という例示を入れるかは、文章の工夫次第だと思う。全体の文体の中でどこまでそれを認めるかをここであまり言うべきではないと思うが、工夫次第である。現行基本構想は、比較的にいろいろかみ砕いて、工夫、議論を重ねたものであり、一つの参照にはなる。

宗田会長

京都は抽象と具象が混在して文化が出来上がっているまち。長期ビジョンと新京都戦略が同時並行であることも文化の深さ。鷺田先生の基本構想は、市民生活の断片を並べたもの。長期ビジョンは現行基本構想のように抽象的に理念を書いて、語り継いでいくのが議事録でも良いだろう。

オーバーツーリズムの話題があったが、これもとても大事な話で、京都の方は嫌々お客さんを受けているわけではなく、好きでやっていらっしゃる。例えば祇園祭がよい例だが、宵山にしろ、巡行にしろ、おみこしにしろ、あれだけ皆さん一生懸命やっているだけに、祇園祭にあれだけ人があふれても、誰もオーバーツーリズムとは言わない。お祭りに来ているだけだと。本来は、神社や仏閣、街並みなどがあり、お客さんがあれだけ来てくれることを、京都の人々が心から喜べるような状況に近づけていかなければいけない。そのためには高屋委員発言の「好きだからやっている」というキーワードはとても大事。当然、祇園祭でも関係ないと言う人もいるかもしれないが、喚起していくところも必要。

世界中、ヴェネツィアやフィレンツェ、パリなども歴史都市だが、オーバーツーリズムは起こっている。それは都市の責任ではなく、たまたま世界の人類の寿命が延びて、所得が増えて、余生で何をするかというときに観光という文化交流を求めているということ。そういう面も含めて、外国との文化の交流が生まれる、その交流を地域、市民の居場所、出番として演出していけるのかということが、議論として求められるのだと思う。

鈴鹿委員

祇園祭の例について、本当にそこがとても繊細なところだ。観光客の人が集まることに対しては誰も何も言わないが、少し値段を高くして海外の方に一番良い席を出すとなると、担い手の人は怒ってしまう。そのように、ちょっとしたことで違うとなってしまうことを掛け違えないようにすることは、とても難しいと思う。

宗田会長

牧委員に発言をお願いします。

牧委員

防災の観点からだ、論点6の中の「普通の暮らし」がとても良いと思っている。被災すると、被災者や被災企業と呼ばれたりして、支援が必要な状態になる。そうなったときに、元に戻るような仕組みをどう作っていくのが重要。論点7が私の主担当だが、その大前提にあるのが論点6。価値観として「普通の暮らし」ができるということをどう守っていくのが重要。この「普通の暮らし」が、京都は他の都市とは違う、いろんな「京都らしさ」がついてくる。

大きな被害を受けた災害からの復興後、戻ってくる人の割合は半分くらいであり、そのうちの3分の1は「私はこのまちが好き」、3分の1は「どうしようかな」、3分の1は「出ていこう」という人に分類される。そのため、このまちが好きだと言っていただくことが、論点7に記載の「立ち直るしなやかさ」の観点で、とても重要である。地域の付き合いが好きな人はそれでいいが、好きではない人もいる。要するに私たちは、地域コミュニティが必要なときと不必要なときがある。子どもが小学生くらいまでは地域付き合いがあり、「うちの子がどこかへ行ってしまった」「ちょっと預かって」といったことがある。その後、中学生くらいからは、別に地域と付き合いなくても生きていけるが、70歳くらいになると、また地域のつながりが必要になってくる。「地域とお付き合いしておかないと苦労する」とよく言われるが、「痩せなかったら後で困る」と言われても痩せないのと同じでなかなか難しい。地域の助けがなくても生きていける時に、どうしていくのか。地域付き合いが好きな人は良いけれども、好きではない人もいる。例えば、災害後の仮設住宅を設計するときも、地域の付き合いができるように、玄関と玄関を合わせたような形と、玄関と家の裏を合わせて、それほど人と密に付き合いなくても良い配置を組み合わせた

りしている。地域コミュニティによる支援が必要なときと、必要でないときがあり、そのことを踏まえて、どう地域コミュニティの維持を考えるかが重要であるとする。

宗田会長

地域の隣近所の付き合いは重要だが、京都には地域を離れたお祭りや芸事、習い事、商売の関係でつながるといふ人間関係、組織の関わり方が二重三重にもある。こういう場でお会いすると、近所の人がこういうことしているのだと知ることができて、安心して声をかけてもらえたりする。そういう一種のセーフティネットが多様に積み重なっている。地域と離れても暮らしていける時でも、京都なら関わっていける可能性がある。

では、濱崎委員、お願いします。

濱崎委員

自分たちでコミュニティを回す、自分が参加しているという気持ちがとても心地良いという発言があり、そのとおりだと思った。一方で、それがなぜ他人ごとになってしまっているのかについて考えるのは有益だと思う。鈴鹿委員が祇園祭のことを発言されたときに、自分ごとだと思っていたのに、そうではないことになってしまっていたときに、自分のことではなかったのかと突き放されたような感覚が生じるのは悲しい。それをどうしたらいいか考えていた。

野村特別委員が、ある種の京都の危機のようなものをどう書いていくのかをお伺いしたい。第1回審議会で、自然に感謝の気持ちがあふれてくるようなまちが良いのではないかと発言した。それからもう一步進んで、ちゃんと言葉が出ること、行動につながるところまで考えるべきではないか。未来共創チーム会議の方との議論で出た、「ありがとう」「ごちそうさま」「おはようございます」といった挨拶の話は、非常に気付かされることも多かった。目の前には見えないが、その向こうにあるものを想像できるからこそその言葉であり、例えば、そういった言葉にして出すというような具体的な行動を起こすための仕掛けが必要だと思う。

序文は非常にうまくできていると感心した。時間軸を感じられるまち、自然という空間を感じられるまちではあるが、感じるだけではこの先は立ち行かない。「自分ごとだと思っていたけれども」というのは、もう一つの視点がお互いに欠けていたということだと思う。いかに自覚させるか、きっかけをどうつくっていくかが、ポイントだと思う。

歴史的な建物があつたり、伝統的なものがあつたり、着物を着ている人がいたり、それだけで気が付くきっかけがある。そのような空間が非常に大事だが、それは普段あまり自覚されない。コミュニティの中では当たり前のことになっているという鈴鹿委員の指摘は、本当にそのとおりだと思う。もう一步外側から客観的に、もう一つの視点をどう置くかということのきっかけが見つ

かるかが重要。もう一つの視点で見たときに、ここは変えていくべきだ、守るべきだという議論もできるのであって、そこをどう提示できるのか。

野村特別委員

本当にそのとおりである。余談だが、2万字の本文案は、かなり強い危機感の基で執筆した。他方で悩ましかったのは、私は経産省と米国留学の経験からも、世界の現状も比較的近く感じている部類かとは思ふものの、あまり強い危機感を抱いてはいない方々に対して、煽情的ではない言葉を投げかけて危機感を抱いてもらうということは、やはり非常に難しい。冗長な説明文のようになってしまうのも芳しくない。このバランスをどうするかは、市長と事務局とも御相談したいと思っている。繰り返し、私自身としては危機感がとても強い。このままでは時流に負けて、京都が長く育んできた人間的価値が収奪されて消えていくことが目に見えている。

翻って、どのように自覚してもらうかというお話も、本当に示唆的かつ奥深い。

多分に概念的に過ぎる話になってしまうが、誰がまちの担い手なのか、その源泉がどこにあるのかを、きちんと言い当てることができれば、それにふさわしい「京都市的な何か」が言葉にできる気はしている。しかし他方で、委員の先生方の御意見を伺う中で、極めて聡明かつごもっともな御指摘として、単純化して申し上げると、物事にはトレードオフ構造があり、何もかもを総取りすることはできないという点があった。かつ、別の先生からは、選択と集中を考えるに際しては、タイミングやリーダーシップも大事になっていくというお話もあった。これらのことを書き込むか書き込まないか、もしくは、書く場合も本文なのか別の形なのかは検討中だが、御趣旨は本当にごもっともである。

宗田会長

目に見えない奥行きが空間的にも時間的にもある。後ろにある人のつながり、人間関係は目に見えない。そういったものを自覚していることが、京都人のマナーや作法につながると思う。業界を越え、地域を越え、相見互いという関係が上手にできている。それが1200年の積み重ねかと思う。

インバウンドがだんだん増えてくると、「この庭はこういう人が守っているのだな」と、むしろ日本人よりも先に気付くような方も出てくる。工芸品の複雑さ、緻密さ、美意識や、庭のきれいさ、建物の手入れの仕方など、気付くことで敬意を持ってもらえる。そこからマナーを守りつつ、できれば京都の文化に関わっていくことにつながる。興味関心から始まり、より深いコミットを引き出す力が京都にはある。そのメカニズムがまち柄の根底にある。それはもちろん文化の力であり、自然に感謝するということだと思う。

では、田中委員に発言をお願いする。

田中委員

私は、暮らしも仕事も基本的には京都市でやっているが、正直に言って、誰のためのまちなのかと考えてしまうことが非常に増えてきている。特に中心部では、マンションやホテルがたくさん建ち並び、物価高の影響もあるが、飲食店に行っても、なぜこのように高いのかと思う。これは物価高に加えてインバウンド価格の影響があるのではないかと。市民よりも観光客をメインに考えられている状態が、少しずつ目に入るようになってきている。ライフステージを考えた時に、京都市で子育てしていくとなった時に、本当に幸せに暮らしていけるのか、不安が強くなってきていると感じる。

資料3のP. 26の「京都市の惜しいところは」という問いで、交通の便や子育て・教育の改善が回答の6割以上。長期ビジョンの中に、市民生活がより良くなっていくことが書いてあるほうが、自分たちが住んでいるまちが発展していき、ここで過ごし続けることが自分にとって良いことだ、というポジティブな感情を持ってもらうことが、余裕のようなものを生み出すのではないかと。余裕が出てくると、感謝が増え、地域とつながっていく、自分事として何か行動していくことにつながっていくのではないかと。

雇用や経済の話はどこに入ってくるのだろうか。例えば、企業誘致。「大阪にオフィスがあるから、京都には別にオフィスをつくらなくてもいい」と言われることもある。大阪にオフィスがあるのに、わざわざ京都にもつくる意義を説明できるようになりたい。説明できない自分がもどかしい。長期ビジョンを見て「京都にオフィスを建てたいな」につながるよう、経済と雇用の話は長期ビジョンの中に入れたほうが良いと思った。

宗田会長

経済のことはもちろん重要。東京本社が京都に支社を置くことはハードルが高いが、海外が本社で、京都にわざわざオフィスを出す企業も増えている。

では、原委員に発言をお願いします。

原委員

春闘真ただ中という状況の中で、大企業は軒並み満額回答だが、7割方を占める中小企業は上げられない状況。企業側は上げたいけれども体力がないのが実情である。何か特効薬があれば良いが、ないのが現状だと思う。

総合計画審議会以外にも様々な審議会に出ているが、地域コミュニティや地域のつながりについて発言している。人口減少や少子高齢化で、たちまち1年や2年で解決できる問題ではないが、コミュニティの重要性について未来共創チーム会議の方が提言した0.1のつながりに、非常に感銘を受けている。

日本はもともと仏教国なので、檀家という仕組みがあり、お寺がある場所と違うところに住んでいても寄付をする。京都に住まなくても、京都に携わった人が、京都が好きだからという緩いつながりでつながっている。そのような方

たちをいかに活用していくかで、京都の未来が生まれてくるのではないかと
思っている。温かく迎える都市だということが重要。

行政からすれば、住んでもらなければ、あるいは企業誘致をしなければ、税
収がなかなか入ってこない状態になる。しかし、地域の文化は、京都に住ん
でない人でも携わっていただけるような、緩やかな視点で長期的に見るべきだ
ろう。

宗田会長

関係人口の多さは、京都は日本一かもしれない。京都好きの人が世界中にた
くさんいる。

それでは、小川委員に発言をお願いします。

小川委員

皆様の意見を大変興味深くお聞きしていた。市民等へのアンケート結果を
見ると、市民生活に関して非常に具体的な事柄が指摘されている。新しいこと
と古いことを共存させていくことを、「バージョン2.0」のような新しい言
葉を用いて表現していくことが重要ではないかと感じた。

京都の人たちは古いものを継承しながら上手に刷新する知恵を持っている。
新しく外から来る人たちを温かく受け入れたいけれども、オーバーツーリズム
は解消したい。美しい自然を残したいけれども、まちの開発や経済発展もした
い。そういった相反する欲望は簡単に両立するものではないが、よりプラクテ
ィカルに考えてみれば、例えば「道路インフラ」の問題においては、テクノロ
ジーを使って上手に交通誘導する仕掛けをつくる。あるいは、交流をするため
の新しい空間づくりやそれを仕掛けるような技術を導入するといった、実践的
なアイデアを考案できるのではないかと思う。

私はシリアスゲームを研究しているのだが、例えば、メインの観光地ではな
く京北に行ってもらえるように、観光物語を作ってゲームを楽しむように
人々を誘導するなど、人々の行動を規制するのではなく誘導していく仕掛け
は様々な形があり得ると思う。つまり、こうした実践的な形で市民生活を圧迫
している問題を解決することはできるのではないか。京都は関係人口も多い
ので、ファンダム・エコノミーという用語もあるかもしれないが、ある種の
京都ファンに投資してもらって仕掛けいくつも考えられるのではないかと思う。

古くからの街並みや京都人らしさといったものを維持しつつ、しかし新し
いものを受け入れて上手に発展していく、京都ならではの考え方、方法のよう
なものを、「バージョン2.0」のように上手に言い表すことができれば、市
民の皆さんも「そういうふうにして欲しいな」と思うのではないか。

宗田会長

アプロプリエイトテクノロジー、あるいはオルタナティブテクノロジーで、
何か新しいアプローチ、新しい方法で解決するというのは、常に京都らしい問

題の解き方かもしれない。別の光を当てることによって別の解決方法が見つかるということもあり得ると思う。

続いて阪部委員、いかがか。

阪部委員

私からは地域のつながりに関して、自己の経験も含めてお話をしたいと思う。私は京都と大阪と神戸でコミュニティ運営を行っているのだが、レンタルスペースを借りる際、京都のコミュニティスペースは、その場所のルールや管理者にも京都らしさがあると感じる。京都のコミュニティスペースは、管理されている方がこだわりを持って運営されており、ルールがきちんとしていて、それを守ってほしいという思いが前面に出ている。大阪や神戸では、もちろんルールはあるけれども、京都ほどしっかりとした意思は感じない。管理者の方も最初の頃は、他所者に対する距離感があるが、1年、2年と借りて、信頼関係や人間関係が構築されてくると、とても親切に話をしてくださったりして、それが大阪や神戸にはないと思っている。

今年の2月に大雪が降った際には、管理者の方から事前にイベントの延期を進言いただくなど、様々な便宜を図ってくださった。そのような地域のコミュニティが京都のよさで、それがまだ失われていない。そういったものを大事にしていけるようなビジョンは大切だと感じている。

また、地域のコミュニティづくりについて、京都市の行政はかなり入り込んでコーディネートしてくれる、市民巻き込み型でやってくれると感じている。人権担当の職員は、京都市内のLGBTQのコミュニティを全て回られて、ネットワークを構築された。そういう部分は大阪にはないし、長年住んでいるが感じたことがない。そういうところは良さ。そうした地域のつながりは、この先絶えそうになっているが、守っていけるようビジョンに取り込んでほしい。

宗田会長

阪部委員の発言に関連し、人のつながり、福祉の観点で福富委員にお願いしたい。

福富委員

思い返してみると、弱い人達が強いというのが京都。水平社ができたのも京都だし、日本最初の盲学校が設置されたのも京都。認知症の人と家族の会も京都発祥、男性介護者と支援者の全国ネットワークも京都から始まった。いろんな人のつながりがあって、普通の暮らしがあるが、その中で弱い人達が実は強いということが見えてくれば良いというか、そういった光の当て方もあってよいと思う。

また違う話だが、中京区役所では屋上を緑化し、そこで市民がホップを育てて収穫して、クラフトビールのブリュワリーに持ち込んでビールを作ったりしている。行政と市民の関係、行政は基礎自治体として住民サービスを提供す

るだけではない付き合いがあるのが面白い。

宗田会長

京都発祥の社会福祉的取組が生まれてきたことと、地域コミュニティの歴史、伝統がどう関わるか、新しい取組を京都がどう支持したのかというのは重要な点であると思う。

それでは藤野委員、御意見を願います。

藤野委員

序文を読ませていただき、野村特別委員の心身一元的な価値観がベースにあるということを強く感じた。こういった価値意識は、世界、例えばフランス哲学などから過去に関心を持たれてきたし、今後も注目されていくと思う。序文を英語で発信していくおつもりはあるか。昨今はA Iで容易に翻訳できるようになっているが、やはり言葉をしっかりと選び、世界にも発信していったほしい。

京都市は現在、突き抜ける世界都市を掲げ、市政を展開しているが、このような思想を基盤に歩む京都を理想の都市として学びたいと考える世界の都市もでてくるのではないかと思われるからである。

野村特別委員

大変励みになるとともに光栄である。おっしゃるとおりであり、事務局とも話をしているのだが、英訳することを想定した構成にしている。英語圏の人に伝わりやすいロジックも念頭に、このような構成にしている。

少しだけ、哲学的な意味合いを二つの観点から申し上げたい。20世紀に興隆したいわゆる現象学、ポスト構造主義や脱構築といった、単純化すれば、心より身体が先立って存在しているのであり、世界は心や認識によってではなく身体によって構成されるといった議論や、主体と客体、自己と世界が分かれているようで実は不可分なのだといった議論が展開された。私は禅哲学が専門で、禅哲学の祖の道元などを研究しているのだが、大げさに言えば、道元は700年前にこの京都の地で既にこういったことを論じていたとも理解できる。こういった視点も含めて、国際社会への遡及を想定して序文を執筆した。

もう一つだけ付言すると、いわゆるヨーロッパがけん引してきた今日までの思想潮流は、実はアフリカやインドのようないわゆるグローバルサウスと呼ばれる地域とも若干のギャップがある。これらの地域の思想伝統は、むしろこの序文でお示したような、いわゆる京都的なものとして想定したものと非常に親和性が高い。この序文は、25年先において、今日日の言葉で言われるグローバルサウスとヨーロッパ世界とを、植民地主義の歴史をも超えてつなぐような、新しいソフト・パワーの在り方も念頭に置いて記載した。英訳に当たっては、A Iに全面的に頼るようなことは避け、きちんと進めたいと思っている。

藤野委員

京都市は出生数の減少が激しい。持続可能な社会の実現を見据えた場合、これからの25年、生殖、出生、育児などケアの視点がとりわけ重要視されなければならない。近代社会では、こうした視点がしばしば影のごとく、不可視化されてきた。だからこそ、企業等が利潤を追求でき、経済成長してきた側面もある。しかし、今後、持続可能な社会を目指し、ケアの視点を重要視するならば、社会の在り方自体が相当変わらないといけない。若年女性人口も25年も待てないぐらいのスピードで減少している。これまでの利潤追求型の社会を問い直す必要がある。企業が、人権やケアを重視しないといけないということで、若い世代で構成される未来共創チーム会議は危機感を覚え、脱成長というキーワードを出してきたのではないだろうか。脱成長は誤解されやすい言葉かもしれないが、70年代ぐらいにフランスで議論されるようになり、2000年頃に経済学者のセルジュ・ラトゥーシュが世界に広めた。その後、経済人類学者のジェイソン・ヒッケルも脱成長論を唱え、最近、若い人たちの共感を得ている。ラトゥーシュは、脱成長という言葉で「成長をゼロにしろ」と言っているわけではない。「利潤追求の体制を問い直す」という意味で使っていると思われる。ケアを重視しなければ、持続可能な社会にはなりえない。現状に対しては危機感をもっており、言葉に拘るつもりはないが、その点はメッセージに入れるべきと考える。

続いて論点5についてだが、東京に次ぎ、京都には大学が多い。この先25年間となると、企業の大半は日本的な雇用システムからジョブ型雇用に移っているだろう。今、およそ2割の大企業は既にジョブ型雇用に移っているとされている。ジョブ型雇用に移っていくと、外部労働市場が発達してくるため、転職も活発になり、リ・スキリングが不可欠になってくる。そのような意味で、大学機関の多い京都には優位性があり、このまちに多くの人のリ・スキリングで訪れる可能性もある。もちろんオンラインでということもあるだろうが、京都と関係する人たちが増えるのではないかと思っている。生涯学べる環境、いつでも学べる環境というのが京都というまちの一つの強みなのではないだろうか。

宗田会長

働き方や学び方も変わるが、論点6でのケアについては、孤独化、一人暮らしが増えてくる。一人でもつながりを持ちながら生きていけ、同時にそれがケアされる。企業や地域コミュニティにそれを担ってもらい、プラスアルファとなる新しい仕組みを考えていかないといけない。それを文化や芸術の力でどう京都らしさを追求するのか、それをうまく示せば人類にとっての新たな解決方法となる。また、京都では福祉の新しい取組をしてきたことの延長になる。

続いて、貫名委員にお願いしたい。

貫名委員

論点4について。序文にあるとおり全てに関わってくる部分で重要だが、多くの人にとって扱いにくいテーマ。京都の自然環境を捉えるときに勘違いしがちなのは、自然は壮大なものを考えがちだが、京都市の自然は「二次的自然（セカンダリーネイチャー）」、すなわち、手付かずの大自然ではなく人が継続して関わってきたことで生まれた自然である。実際に京都市内の山奥に行っても誰かが植えた木がそこにあり、踏跡があり、炭焼き窯がある。基本的に京都の自然は手付かずというよりは二次的自然だということだ。そこで、それをどう受け継いでいくのかという部分に答えるのであれば、一つ言えるのは、それといかに関与するかに尽きると思う。触らないままの自然ではなく、そことの相互関係の下で生活や文化ができていくというところに終着する。

もう少し具体的に言うとしたら、例えば、京都の自然はまちの緑があり、公園や街路樹、京町家の庭がある。そういうものを自然と捉えない人もいるが、ある意味では二次的自然であるので、それをどう良くしていくか、維持していくか、さらには作っていくかという部分が、論点6にある普通の暮らしに関わってくる話になる。

もう一つ、まちではなく、洛外というか三山の自然である。こちらも実は今は非常に重要で、先日、伝統工芸が今なぜ消えていくのかというテーマで全ての担い手にインタビューされた方がいてその結果を見たのだが、そもそも技術が失われている問題もあるが、材料がないというのが一つの大きな課題になっているとのことであった。このあたりが実は現代市民が気付いていないところである。例えば身近なところでは、清水寺の舞台の材料はケヤキだが、昔はおそらく近辺から入手できたのだろうが今ではもうそのような木はない。祇園祭の山鉾も装飾を剥ぐと木組みが出てくるが、その材料も今はもう近くにはなく、海外から輸入するといったような話になっている。ひとえに自然というと大きすぎるが、人が関わってきた自然と捉えると、より具体的な環境保全の話につながると思う。

序文については、歴史と文化に関する2段落目。「人間的遺産の享受者であると同時に、これらの継承者でもある」について、これにプラスで創造が京都の活力でものづくりにつながる。受け継ぐだけでなく、どう活用するかという点に踏み込んだ方が良いのではないかと感じた。

宗田会長

二次的な自然は伝統工芸など、京都の根底を支えている。創造の点については、1200年の歴史の中には、建築も庭園も、もちろん伝統工芸品も、色々なものが新たに生み出されてきている。どのような形でクリエイティブな自然、二次的な自然をつくり上げてきたかという観点も、また京都の美意識として重要な位置を占めると言えると思う。

それでは、松井委員にお願いしたい。

松井委員

序文を拝読し、特に「人間は、過去に生かされ、未来を生きている」は、沸々と京都人の血が熱くなった。なぜかと考えると、意識はしていないが、過去を守って守られてきた空気感。文化に淡く関わっている、あるいは日常生活のすぐ横にそれがあつた感覚だけれど、それが京都人の雰囲気を作り出してきた。それを守りたいからだと思つた。守り、伸ばし、接しているうちに新しいアイデアが生まれ、創造につながっていくということ。平時は意識していないが、一読してもらうことによって、私も京都人であると思ひを持ってもらえれば良い。

しかし、アンケートの結果にあるように、気持ちが守られない不安感、脅かされている気持ちがある。どのように解決するかは、7つの論点に表れているのだと理解しており、その点で序文とマッチしている。私自身、方向性を決めるとき、目的は何かを意識する。それはとても抽象的だが、それがあつたから具体的な目標がでてくる。論点は明らかに目標であり、そこから具体的な施策などが生まれていくのだと思う。これからの25年は、人口構造も変化し、社会情勢にも柔軟に対応していく必要があるならば、今25年間を具体的に詰めるより、大きな方向性を共有し、その都度耕していく方が良い。その中で、経済がしっかりしないと立ち行かないし、インフラもきちんとしていないと様々なことに共存できない。また、災害に対する備えもしないと立ち直れない。その意味で新京都戦略との関係性もあるのだと理解している。「総合計画」が表紙にできるなら、「計画」というと具体的なものが出ると受け取られてしまうので、違う言葉の方が受け入れられやすいのではないかと思う。

宗田会長

序文を読んで私も京都市民だと感じていただけたということは、非常に重要な点である。それが理想の市民目線ということにつながると思う。まさにあるべき姿を示していただいたと思う。

それでは、曾我副会長からお願いしたい。

曾我副会長

まず、政治について。計画が出来上がつて終わりではない。市民を含めてどう考えていくのかは計画を作つた後も継続していくもの。そう考えたときに、間接民主主義は今後25年で難しくなると思う。やはりネットなどでは特定の関心が増幅されることは止まらないし、そこで生まれる分断も、今後もずっと続いていくのではないかと思われる。日本も例外ではなく、様々な事実に基づかないような形での非常に攻撃的な活動などとも無縁ではない。実際にそういうことが起きているのは選挙である。選挙は一時的なお祭りのようなものなので、一時的に特定の関心が増幅したりする。間接民主制にはそのような面があつて難しいと感じるわけだが、様々な人が様々な思つている中で、よく分かつていないなら政治に関わらないでくれといつて済むようなものでもな

い。こういう問題をどのように解消していくのかということは今後ずっと続く大きな課題だと思う。

とはいえ、デジタル化なくして多くの人が関わる政治は達成できないというのもまた事実なのだろうと思う。長期ビジョンの策定でも、特設サイトなどを設けているが、まだ意見聴取にとどまっており、議論までは至っていない。出来上がったビジョンをどう考えるのかという時に、デジタルを使いながらの参加のシステムをどう作るのか、今回のビジョンの中でつなげていけると良い。

次に経済について。経済は基本的に資本主義というか、お金が絡むところで成長が起こる。もちろん成長には分配の問題や経済活動自体が抱える問題があり、それも考慮しなければならないが、一方で、経済活動が伴わないと人々の暮らしが成り立たないのも事実である。そのような中で京都はポテンシャルがある。基本的に今成長し得るようなところは、ハイエンドなサービス業といわれているような、人々が求めているものをつくり出していくこと、あるいは製造業でも非常に高度な製造業である。京都は製造業も強いし、大学も含めてクリエイティビティがある人が多くいる。京都が頑張らないと日本の経済が立ち行かない。規模的には東京は強いが、京都でやっていけないようでは今後の見通しが暗いと言わざるを得ないので、経済的な面で京都が果たす役割をしっかりと持っていただきたい。

ただし、お金だけで社会が動くわけではない。コミュニティのようにお金は絡まないけれど、人と人とがつながって活動があるということは重要だ。お互いに知っている、同じ関心がある人たちだけが結びついている状態を、もっと広げてつなげていけないかと思う。貨幣は交換を促進する媒介手段である。金銭的な活動ではない、社会に向けての活動の交換を促進するようなことが考えられないか。例えば、地域通貨である。経済的なものを交換するためのものでなく、ボランティアでポイントが付くようなもの。有名なものは小田原の「おだちん」などがあるが、ポイントが貯まると協賛店でサービスが受けられる。地方自治体が金銭を発行してはいけないが、社会的な活動を媒介することで今までとは違うところのつながりを作っていく新しい仕組みを作っていくといけない。京都はつながりが強い歴史があるが、それだけに頼ってはいられないほど流動的になっている。深いつながりには入っていけないが、自分の活動だけをしていて良いとも思っていない人と関わらせるきっかけになる。こういうものがあると、今後の25年に新しいものを出していくものが見える。

最後に行政についてである。行政は、インフラや福祉、教育などの政策領域的な分業と地域・区のまとまりの分業で成り立っているものと理解している。今回の7つの論点は、それをまたがるような形で設定されており、人ごとになっているのではないか。今後25年やっていくときに、政策領域ごと、組織の組み方と異なる横串に刺さる論点が重要だと行政として思われているのであれば、組織を中心にするような形でやっていこうと行政で考えているのか。これまでも政策領域で分業してきた体系と異なる形の政策課題が出てきて、必要になってくることもあり再編してきた。行政での論点のまとめ方は、行政にと

っての自分ごとになっているのだろうか。

宗田会長

最初におっしゃった政治の話だが、25年たったとき、政治をめぐる状況がどう変わっているかは一番予断を許さない。報道の仕組みが過去25年を振り返ってみても急速に変わってきていて、1995年と2024年の新聞発行部数を比べると激減している。テレビやインターネットの関係においても、夜の7時～9時のニュースの時間に、テレビを見ている人よりインターネットを見ている方が多いと、NHK放送文化研究所の国民生活時間調査ではっきりと示されている。分断という表現を用いられていたが、マスコミを通じて政治を知ることが希薄になってきて、ネットなのかそれ以外の口コミや人のつながり、労働組合の組織も力はなくなっているとはいいつつも政治行動を行っている。これをどう見るのか。市民参加だけで光が見えるかというところだけではないと感じる。長期ビジョンの審議会ですら、25年後どうなっているか考えるときには心もとない。市民が参加し、意見交換し、案を練ることは、過去25年で積み上げてきたとはいうものの、実はこれが砂上の楼閣であって数年のうちに崩れているかもしれないという御指摘と理解する。これは極めて重く受け止めなければならない。

続いて安保副会長からもお願いしたい。

安保副会長

序文を拝読し、「不断の努力」や「責任」は憲法の本質を書かれていると感じた。それを「わたしたち京都市民」の意思として書かれているところで、このビジョンが京都の市民のための憲法となるのだと感じた。

困難な時期ほど、市民にはいろんな不安がある。戦争を身近に感じるかもしれないし、自然災害もそうだ。そのような時に理念をもったところは強い。小さなNPOを運営しているが、理念をスタッフと共有することで維持できているところはある。市民として持つべきところを明確に言語化するのは意義があることと改めて感じた。

「歴史と文化を介して人間性を回復できる」という箇所については、人と絡めてあることは大事だが、これを読むと、少し敷居の高い文化や芸術などを想起させるので、市民の生活に生きている文化、日常の中に息づいている文化こそが京都が他の都市と違うところだと思うので、もう少しその点を強調していただきたい。

論点について。アンケートを見ると、市民は現実社会を生きているので、それとつなげる必要があるため、このような論点が出てきたと理解した。大人の思う京都の惜しいところの中で、バスや鉄道などの交通事情の次に子育て・教育が出てきている。大人が次世代を育てることについて惜しいと思っていることは重要なのではないだろうか。様々な子育て施策を見て、他都市と比べて京都は劣っていないがアピールが足りないし、市民に実感されていない。

今後の論点とするとき、市民に伝わっていないことが大きな課題だと感じた。子どもたちへのアンケートでは、将来住みたいまちに自然や環境、コミュニティを挙げているところが意外であった。今の子どもたちは、学校の時間以外はSNSとゲームに多くの時間を使っているはずなのだが、将来住みたいまちに自然や環境、コミュニティというものが出てくるのは、大人から聞いて実感しているところなのかもしれない。子どもたちが地域の公園等で長い時間遊んだりして過ごすことができない生活になっている中で、コミュニティと交流を子どもたちが求めているのなら、京都のコミュニティを維持していくには、行政としてとても工夫がいるところだろう。

序文や論点を見ると、大人が対象だと感じる。ぜひとも、子どもや若い人が自分たちも対象であると実感できるものにしてほしい。全体を読めば、いわゆる出来上がった大人の生活がイメージできるが、今成長している子どもたち、これから頑張っていこうとする若者、あるいは元気な時代を過ごされて今後もしきいきと過ごそうとされる上の世代は、ここからはイメージできない。子どもや若者が京都で希望を感じる要素は大事。また英訳されるなら、子どもたちの英語の暗唱コンテストで取り上げてもらうほど、暗唱できて音にできる工夫も必要だと思う。

宗田会長

英語を習い始めた子どもが暗唱できるような名文になるようなことは大事。憲法のようなものとおっしゃったが、憲法に理想をどこまで書くかは国ごとに違う。日本国憲法は、理想を文章にして素晴らしいと世界から褒められたりする。それぞれ、そのまちがどういう長期ビジョンを定めるか市民の理想の体现だと思う。京都で生まれ育つ子どももそうだが、京都に集まる若者たちも子どもであって、その若者たちに何を提供できるかも重要である。子どもから大学生に成長するにあたり、いろんな選択肢を提供できることも、地域コミュニティや地域経済の大きな役割。子どもに配慮が必要で、それをどのように市民に共有できるかということかと思う。また、子育てをする市民が実感できるような政策がそこにあり、そこに疑いを持たずに京都に住んで良かった、京都で子育てしようと思えるまちにしていくという伝わり方をどう考えるかということが重要である。

松井市長

行政、政治の在り方を問われているが、それは大変重要な論点である。私は新しい公共を唱えており、この間の「0.1市民」という概念にとっても共感している。昨日行われた KYOTO Innovation Studio では、「0.1市民」のみならず、「0.1市役所職員」をどう増やしていくかという話をした。要するに住民自治であって、自治体だからこそ、住民自治の重要性を今一度噛み締めなければならない。住民自治が発現されるまちの制度設計が重要であり、曾我委員がまさにおっしゃったように、間接民主制を前提にしつつ、より市民が参加意識

をもつようなまちの在り方を考えていかなければならない。例えば、社会福祉協議会や自治連合会、町内会、市政協力員をどう次の時代へ再編していくのか。京都市職員はプロフェッショナルとして税金で給料をもらって仕事をしているが、そうではない市民がどう関わっていくのか、他者やまちをどう幸せにしていくのか考えないといけない。それも含めてまち柄といえるビジョンはとても素敵だと思うがなかなか難しい。

行政組織論としては、政策領域的な分業。これは政策組織のサプライサイド、どういうツールで何を目的にしていけるのかで領域分担が行われてきた。しかし、最近の潮流として、子ども家庭庁や消費者庁のような受け手の属性に視点を置き、これまでと異なる視点で政策を行おうとして行政自身が混乱している。それをどう解きほぐしていくかということだが、例えば医療の世界においても、外科の中に脳神経外科、消化器外科など多様な診療科があり、他方でペインクリニックのようなものがあったり、複合的な診療科があったり、あるいは予防医療という領域が生まれたり、課題に対してどう対峙するかという点で様々な試みが行われている。行政も同様にそのような試みを行っていかないとけない。このような時代環境の中で京都というまちの在り方を考え、まちの課題をどう解決するのか考えたときに、どのような体制が良いのか。市民の巻き込み方も含めてどのような市役所体制が良いのかは重い課題であり直ちに結論は出ない。行政は不幸の最小化だけでなく、いかにウェルビーイング、すなわちそれぞれの主体やまちの幸福度をあげていくかを考えなければならないという発想がこれまでなかった。課題に対し処方箋を書き、治療薬を処方しているだけであったが、その課題に陥らないための予防医療的な行政や社会の在り方とは何か、また、より幸福度や充実度を上げていくかというところに所管庁はないわけだが、そのような行政の在り方や社会の在り方を考えていくというのは、実は根源的な課題である。本当は、社会全体の課題を解決して、より幸福度を高めていくというメッセージが出せればそれだけでも実は大きなビジョンになると思っている。

宗田会長

自治体だからこそ市民参加を考えていかないとけないという点、この25年やその前の25年含めて、自治連合会による住民参加と、NPOなどの市民参加と2つあって、それをどうシフトというか、協力し合いながら変化していくかということかと思う。例えば、消防団も住民参加の際たるものであるが、より現代的になってくるとコミュニティ防災に加え、コロナなどの対応や福祉の領域でも、というようにコミュニティも大忙しになっている。様々な役割を背負っていつている反面で、一人暮らし世帯が増えているという問題がある。

松井市長

行政組織ごとの所管省庁が紐づけた下部組織として、住民参加の体系ができ、それが地域ごとにブロック分けされてきた。それ自体はたくさんあるが、実際

の担い手はそんなにいない。多くの人が兼任し、重圧に押しつぶされているのが正直に言って現状である。少子高齢化の問題もあるが、下部構造としての住民参加、すなわち住民を取り込むという体系の在り方自体が問われている。NPOなどはある程度は領域横断的なものもあるが、消防団などとはまた異なる領域で活動されている。その意図を解きほぐすことは地方行政全体の大きな課題である。

宗田会長

「わたしたち京都市民」で好きだからやってもらおう社会的な仕組みを作らないといけない。今、中学校のスポーツを地域に出す話も動いているが、その一方では、民生児童委員が不足して困っている。消防団も不足している。どんどん緊急な課題に対しても対応していかなければいけない。松井市長は自治に詳しい方なので、専門家としてもいろいろ知恵を出していただいて、それらを再編していくことも、京都市だからこそできることではないかと思って見ている。

文化財や伝統工芸に関して。観光に来られるお客さんは、京都の文化財は国が守っていると思っている。しかし、市民、住民、お寺や保存会が守っているのは、京都はみんな分かっている。主体性も京都の特徴のひとつ。クラウドファンディングが集まるのも京都の関係人口の多さから。好きだからやっていることが、市民の自発性であり、ウェルビーイングでいう、体の健康、心の健康、そして社会的な関わりを持つことであり、ソーシャルウェルビーイングとなる。それが結び合っていて、新しい制度としてどう設計するかを次の25年間考えていかないといけない。

松井市長

少なくともまちの在り方としてそのような論点提起は必要かもしれない。それはコミュニティの在り方であり、コミュニティと行政の関わりの在り方である。

宗田会長

現行基本構想の策定時には、行政区ごとに基本計画を作ろうということになった。我々のような人間が手分けして行政区に張り付き、区ごとの会長にも来てもらい、細かな交流の様子などを見ながら計画づくりを行ったが、これから先どうするか。果たして行政区単位で良いのか。行政計画のフレームをどう考えるかということについても議論する時期に来ている。次の25年に変化するものを委員の皆さんがどう捉えて、どういう手を打てば良いのか考えることこそ長期ビジョン。それに対してわたしたち京都市民は何ができるのかを示すのが、序文の在り方だと思う。

曾我副会長

例えば交通の問題を一つとっても、市民はこれを行政が「どう（解決）していくのか」と思うわけだ。つまり、今議論しているものが単にビジョンになってしまって、理想像なり将来像ではあるが、そこへの道筋が全く見えないようなものになると、市民は関心を持ってないだろう。言葉を換えれば、行政自身が、そのビジョンを見て自分たちがどうやっていくのか考えられないといけな。今の組織を前提にしたうえで、自分たちはこういうことをやらないといけなという具体策の考案につながらなければ「絵に描いた餅」になる。今の論点では、自分たちの組織でどのように受け止められるのか自分事になっていないと結びつかないままになる。全体的に序文があり、それを具体化する論点として作られたものと想像するが、やはりボトムアップの視点というか、今行政のそれぞれの現場で抱えている課題があり、それを解決していった先に25年後があって、その道筋をどうするのが見えてこない、まさしく「絵に描いた餅」になってしまう。その点は危惧している。

宗田会長

絵に描いた餅にならないためには、審議会ですっかり議論することが重要だ。両経済団体の代表である榊田委員と堀場委員と議論できるのは稀有なこと。自分が参加することで行政を通じて産業経済にも発言できるのではないかと思わせるのが京都の市民参加の仕組み。町衆が支える、経済面から見ても自治の伝統が存在しているというのは京都が誇るべきところではないかと思っている。

プラー委員

市民レベルの話になるが、序文の最後の段落が良い。世界中の人々と、互いの歴史、文化を尊重しながら平和を実現するという言葉が良い。インバウンドのオーバーツーリズムの問題が発生し、分断しているように見える一方で、京都市を外国籍市民が支えている部分もある。ネパール系の方がホテルの清掃や介護職、製造業などで働いており、それにより税収も上がっている。IT分野でも海外から人材が入ってきており、担い手としてもこれからの25年間で重要になってくる。そう考えると、資料3「みんなで描く理想京」の意見とりまとめを見ても、どれだけ外国籍市民の意見が反映されているのか分からなかった、これからアンケートされるのであれば、もっと外国籍市民の意見を取り入れられるよう工夫いただきたい。

宗田会長

新型コロナウイルスの流行を挟んだこの十数年の間にインバウンドが急速に増えており、京都市民も戸惑っている部分はもちろんあるのだが、今のお話にあったように、インバウンドを通じて京都は外国人と接する機会が増え、あるいは先端企業で働く外国人も増えた。留学生なども加えて、京都はグローバ

ル化の先端に行くようになった。最初は観光客として京都を訪れ、そのうちに留学生になり、エッセンシャルワーカーやIT企業で活躍するというように、外国籍の方の社会への関わり方も深くなっていく。その過程で京都をより深く理解され、様々な意見を述べるなど京都にコミットされていくということだと思う。

これからの25年間のプロセスを考えた時に、歴史都市だと威張ってあぐらをかくのではなく、先人が積み重ねてきた京都の文化遺産をもって世界のために尽くそう、そのために世界の人々と一緒に世界を考えられるようなまちになろうと。まさしく世界文化自由都市宣言にうたわれた理念の体现を目指して、今回の長期ビジョンが描かれようとしている。

そういった意味では、これから先、プラー委員がおっしゃるような流れになっていくと思う。おそらく25年後には今よりももっと外国籍市民が増えているだろう。現に伝統文化や伝統工芸の世界でも活躍している人も多い。留学生ももっと増えてくるだろうと思う。そのような過渡期となる25年間を、京都市民の目線でどう解いていくかが、我々に求められている仕事だろうと思う。

野村特別委員

私からは視点を少し変えて数点申し上げたい。単純計算で、1万字を委員の皆様方の人数で割ると、一人当たり500字ということになってしまう。何を申し上げたいかという、ぜひ事務局の皆様にご検討いただきたいのは、ここの議論を、冒頭に申し上げたように、例えば事例集ないし意見集などの別の形で残しておくことも検討いただきたい。

また、誰が、いつ見て、どのような気持ちになってほしいかといったことを、綿密に考えて設計する余地があると感じている。

例えば、社会福祉の分野で尽力いただいている方の自負や気構え、肯定感につながる、あるいは、国籍が違う方や個別の事情やバックグラウンドをお持ちの方に対して地域への帰属意識をもつていただく、さらには、中高生の進路選択に資するような事例やコメントなどのまとめ方もあり得ると思う。

委員お一人当たり500字ではあまりに惜し過ぎる。この長期ビジョンにまつわる様々な議論自体が京都市の未来そのものに直結していくだろうと思うので、ぜひ検討いただければ幸いである。

松井市長

2時間半以上にわたり、熱心に御議論いただいた。厚く御礼申し上げる。序文における本質的な価値、あるいは論点として提示した事柄についての御意見・御指摘は、何らかの形で取り込んで、本日の議論にもあったように多様な市民の皆様に分かっていただけるように努力をしていきたい。

このビジョンだけで全ては語り尽くせるものでもないで、それを受けて行政がどのように動くのか、ビジョンにふさわしい政策の在り方とは何かと

いうことについて、我々行政においても日々しっかり議論をしていく。一度ビジョンを作ったら終わりということではなく、ビジョンを作ったうえで、今後京都市の政策をしっかりと検証していくという視点で貴重な御議論をいただいたことに感謝申し上げます。

宗田会長

次回、第6回審議会では、ビジョン本文案についての審議を行う予定となっている。引き続き御協力をいただきたいと思います。それでは事務局に進行をお返しする。

(2) 事務連絡

司会（都市経営戦略監）

それでは、以上をもって第5回京都市総合計画審議会を閉会する。

3 閉会

(以上)